

[Research Report]

Attitudes toward brain death and organ transplantation

— A comparative survey of nursing college students and their parents, nursing university students,
junior high school students and their teachers —

Hiroko Ishikawa*, Yae Toma*, Manami Nakamura*, Kaori Morimoto*, Ayaka Inoue*
Akina Shimoda*, Manabu Ashikaga** and Hiroshige Nakano**

* Aino Gakuin College

** Aino University

Abstract

The purpose of this study was to compare attitudes toward brain death and organ transplantation among nursing college students and their parents, and junior high school students and their teachers, using self-administered questionnaires. The number of respondents was 373 and the response rate was 36% for fathers and 48% for mothers respectively in a mail survey and 100% of students on in-class survey. Most of the survey respondents recognized the necessity of organ transplantation, and 36% of respondents accepted brain death. Thirty nine percent of respondents were willing to donate organs. Sophomore nursing students with one year preparation in basic course work had a more positive attitude toward organ transplantation than had freshmen nursing students without such preparation. There were five times the number of nursing college students who had organ donation decision cards and they were twice as likely to be willing to donate organs as their parents. Nursing students discussed the issue of organ donation more often with their mothers than with their fathers. Junior high school students had great interest in organ transplantation. Twenty percent of the respondents accepted brain death and most of them were willing to donate organs.

To promote organ transplantation, it is necessary to educate not only university students, but also junior high school students so that their interest and understanding in life and death, brain death, organ transplantation and organ donation can be nurtured.

Key words : brain death, organ transplantation, organ donation decision card, questionnaire,
nursing student

脳死臓器移植に関する意識調査

—— 自記式質問紙調査による看護系短期大学生と両親、看護系大学生、
中学生と中学教師の比較 ——

石川 浩子*, 塔間 弥恵*, 中村 まなみ*, 森本 かおり*
井上 絢香*, 下田 明奈*, 足利 学**, 中野 博重**

【要旨】 看護系短大生とその両親、看護系大学生、中学生とその中学教師を対象に脳死臓器移植の意識調査を自記式質問紙をもちいて行った。対象者の合計は373人（男性 112人、女性 261人）であった。回収率は、郵送にて回答を得た父親と母親のそれぞれ36%と48%以外は100%であった。臓器移植についてはほとんどの人が認知していた。また「脳死を人の死と認めるか」については36%の人が認めていた。「臓器提供の意思」は39%に提供の意思があった。基礎教育を受けた看護系短大2回生は基礎教育を受けてない看護系大学1回生と比較して臓器移植に肯定的な意見が多かった。また看護系短大生は両親と比較して、「臓器提供意思表示カード」の所有率が5倍、「臓器提供の意思」が2倍であった。家族内での臓器提供の話し合いでは父親よりも母親との話し合いが多かった。中学生の脳死臓器移植に対する関心は高く、「脳死を人の死と認める」については20%が認め、そのほとんどの中学生は「臓器提供の意思」があった。今後臓器移植を円滑に推進させるためには、今回の調査結果に示されたように18歳以上の若者に対する「臓器移植に関する教育」はもちろん必要であるが、中学生に対する「生と死」、「脳死」、「臓器移植」、「臓器提供」といった内容の教育がより必要と考えられる。

キーワード：脳死、臓器移植、臓器提供意思表示カード、自記式調査、看護系学生

はじめに

臓器移植は、臓器障害のため人の生命が脅かされたとき、他の人より臓器提供を受け生命の回復を図る医療であり、「臓器の提供」という「人の善意」の上に成り立ったものである。臓器移植の歴史を振り返ってみると、肝臓移植は1960年にアメリカ・デンバーのスタートツルにより世界で最初に行われ、1964年には臨床肝臓移植の成功を治めた。その当時の免疫抑制剤は、アザチオプリンとステロイドホルモンのみで、移

植成績は満足いくものではなかった。また他の臓器移植（心臓移植、肺移植、腎臓移植、膵臓移植）も次々に行われたが同様に不満足な成績であった。1980年代に入り新しい免疫抑制剤（シクロスポリン、タクロリムス）が出現し、移植成績が一気に向上し、現在全世界で年間数万例の臓器移植が施行されている。欧米諸国における各臓器の年間移植症例数¹⁾を見ると、心臓移植は3,500例、肝臓移植は4,000例、肺移植は1,200例、膵臓移植は1,200例が行われ、臓器移植が日常の一般医療として定着してきている。しかし、本

* 藍野学院短期大学 看護学科

** 藍野大学

邦においては諸外国と比較して臓器移植例は少なく、1997年脳死臓器移植法²⁾が施行され、2004年7月までの7年間で臓器提供者数は30名で、各臓器の移植症例数は、心臓移植21例、肝臓移植22例、腎臓移植37例、膵臓移植14例、肺移植16例、小腸移植1例である³⁾。臓器移植が円滑に普及しない要因は色々考えられるが、その一つに日本人特有の死生観や、国民の医療不信などが考えられる。この大きな問題を一つ一つ解決してこそ、臓器移植が社会的にも信頼を得て、医療として浸透していくと考えられる。

そこで看護系短大生とその両親、看護系大学生、中学生とその中学教師に対して、脳死・臓器移植・臓器提供意思表示カード等に対する意識を比較し、脳死臓器移植が本邦で定着しない要因を探索する目的で自記式質問紙を用いて調査を行ったのでその結果を報告する。

I. 研究対象および方法

1) 調査対象

研究協力の承諾を得られた関西地方の都市近郊にあ

るA短期大学2回生86名、A大学看護学科1回生86名、A短期大学2回生の父親86名と母親86名、関西地方の都市近郊にあるB中学校2年生180名、同中学校教師30名を対象とした。

2) 自記式質問紙および調査方法

文献を参考^{1,4)}に二肢または三肢択一で質問紙を作成した。質問項目は、脳死臓器移植の認知、臓器移植に関する法律の是非、「脳死」を死と認めるか、臓器提供の意思、家族と臓器移植について話し合ったことがあるか、15歳未満の移植ができないことの認知、「臓器提供意思表示カード」の認知、およびそのカードの所有など9項目であった(図1)。

データは2004年6月～7月に収集した。A短期大学及びA大学、B中学校の生徒及び教師に対して、直接研究主旨を説明し調査の協力を依頼し回答を得た。短期大学の両親については、研究主旨を文書にて作成し、質問紙と共に郵送し返送にて回答を得た。

分析については、質問紙の項目別に出現率を算出し、また $p < 0.05$ を有意差ありとした。群間比較の際には χ^2 検定を用いて差違を明らかにした。

<p>臓器提供意思表示カードについてのアンケート調査</p> <p>年齢 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上 性別 男性 女性 (脳死・臓器移植について)</p> <ol style="list-style-type: none"> 日本では脳死臓器移植が始まっていますがご存知ですか? ①はい ②いいえ 1997年10月に「臓器の移植に関する法律」が施行されました。脳死判定後、本人の意思と家族の同意の下で、「脳死」は成立します。現法に賛成ですか? ①はい ②いいえ あなたは「脳死」を人間の死と認めますか? ①認める ②認めない ③わからない あなたは自分が「脳死」になったとき、臓器を提供する意思がありますか? ①提供する ②提供しない ③わからない あなたは家族の人と脳死臓器移植について話し合ったことがありますか? ①はい ②いいえ 「臓器の移植に関する法律」は、本人の意思表示が困難とされる15歳未満には適用されません。よって、脳死に伴う臓器移植は不可能です。現法に賛成ですか? ①はい ②いいえ 21世紀の医療は遺伝子医療・再生医療・臓器移植医療といわれています。臓器移植医療は素晴らしいと思いますか? ①はい ②いいえ ③わからない 	<p><臓器提供意思表示カードについて></p> <ol style="list-style-type: none"> 「臓器提供意思表示カード」を知っていますか? ①はい ②いいえ 「臓器提供意思表示カード」をお持ちですか? ①はい ②いいえ <p>(お持ちの方にお聞きます)</p> <p>意思を記入していますか? ①はい ②いいえ</p> <p>脳死臓器提供の意思はありますか? ①はい ②いいえ</p> <p>保護者のサインはありますか? ①はい ②いいえ</p> <p>あなたは自分の家族が「脳死」になり、医師から臓器提供を求められた場合、それに同意しますか? A. 本人の提供の意思が明確な場合 ①本人の意思に従う ②同意しない ③わからない B. 本人の提供の意思が不明な場合 ①同意する ②同意しない ③わからない</p> <p>家族に自分の意思を尊重してほしいですか? ①はい ②いいえ</p> <p>(お持ちでない方にお聞きます)</p> <p>脳死臓器提供の意思はありますか? ①はい ②いいえ</p> <p>あなたは自分の家族が「脳死」になり、医師から臓器提供を求められた場合、それに同意しますか? A. 本人の提供の意思が明確な場合 ①本人の意思に従う ②同意しない ③わからない B. 本人の提供の意思が不明な場合 ①同意する ②同意しない ③わからない</p> <p>家族に自分の意思を尊重してほしいですか? ①はい ②いいえ</p> <p>このアンケートを機会に「臓器提供意思表示カード」を持とうと思われましたか? ①はい ②いいえ ③わからない</p> <p style="text-align: right;">ご協力ありがとうございました</p>
---	--

図1 本調査に用いた質問紙

3) 回収状況

直接口頭で説明し回答を得た短大生・大学生および中学生・中学教師は100%の回収率、郵送にて回答を得た父親と母親についてはそれぞれ36%と48%の回収率であった。全体の回収率は73%であった。

II. 結 果

1) 回答者の属性

表1のとおり、全体では、男性112名(30%)、女性261名(70%)で、年齢は10歳～20歳代の青年層が261名(70%)と約2/3を占めていた。

短大2回生83名のうち、男性7名(8%)、女性76名(92%)で、年齢は青年層が74名(89%)、大学看護科1回生79名中、男性9名(11%)、女性70名(89%)で、年齢は青年層が90%台でほとんどを占めていた。

母親41名のうち、30歳～40歳代の壮年層が27名(66%)、父親31名のうち、50歳～60歳代の向老層が20名(65%)とそれぞれ半数以上を占めていた。

中学教師29名のうち、男性16名(55%)、女性13名(45%)で、年齢は壮年層が14名(48%)、向老層が12名(41%)であった。中学生110名のうち、男

性49名(45%)よりも、女性61名(55%)のほうがやや多かった。

2) 全体373名の主な回答結果

表2のとおり、脳死臓器移植については、「知っている」77%、「知らない」23%と約2/3が認知していた。「『脳死』を人の死と認める」と回答した者は36%、「認めない」18%、「わからない」46%であった。臓器の提供意思については、「提供する」40%、「提供しない」17%、「わからない」43%であった。15歳未満の移植ができないことは、「知っている」42%、「知らない」54%であった。

3) 脳死と臓器移植について

脳死臓器移植は、中学生以外ほとんど(93～100%)の者が知っていた(図2)。「『脳死』を人の死と認めるか」という質問に関して、短大2回生と大学1回生を比較したところ、「認める」と回答した者は2回生54%、1回生が27%で(図3)、両群間で有意差を認め($\chi^2=12.625$, $df=1$, $p<0.05$)、短大2回生のほ

表1 回答者の属性 (N=373)

		男 人 (%)	女 人 (%)	計 人 (%)
全体	10～20歳代	59 (15.8)	202 (54.2)	261 (70.0)
	30～40歳代	24 (6.5)	40 (10.7)	64 (17.2)
	50～60歳代	27 (7.2)	17 (4.6)	44 (11.8)
	70歳以上	2 (0.5)	2 (0.5)	4 (1.0)
		112 (30.0)	261 (70.0)	373 (100)
短大2回生	10～20歳代	4 (4.8)	70 (84.3)	74 (89.2)
	30～40歳代	3 (3.6)	6 (7.2)	9 (10.8)
		7 (8.4)	76 (91.6)	83 (100)
大学1回生	10～20歳代	5 (6.3)	69 (87.3)	74 (93.7)
	30～40歳代	4 (5.1)	1 (1.3)	5 (6.3)
		9 (11.4)	70 (88.6)	79 (100)
父親	30～40歳代	9 (29.0)	—	9 (29.0)
	50～60歳代	20 (64.5)	—	20 (64.5)
	70歳以上	2 (6.5)	—	2 (6.5)
		31 (100)	—	31 (100)
母親	30～40歳代	—	27 (65.8)	27 (65.8)
	50～60歳代	—	12 (29.3)	12 (29.3)
	70歳以上	—	2 (4.9)	2 (4.9)
		—	41 (100)	41 (100)
中学教師	10～20歳代	1 (3.4)	2 (6.9)	3 (10.3)
	30～40歳代	8 (27.6)	6 (20.7)	14 (48.3)
	50～60歳代	7 (24.2)	5 (17.2)	12 (41.4)
		16 (55.2)	13 (44.8)	29 (100)
中学2年生		49 (44.5)	61 (55.5)	110 (100)

表2 回答者全体の主な回答結果 (N=373)

〈脳死・臓器移植について〉				
① 脳死臓器移植を知っている				
はい	いいえ			計
288 (77.2)	85 (22.8)			373 (100)
② 「臓器の移植に関する法律」に賛成する				
はい	いいえ	不明	計	
328 (87.9)	40 (10.7)	5 (1.4)	373 (100)	
③ 「脳死」を人の死と認める				
認める	認めない	わからない	計	
134 (35.9)	67 (18.0)	172 (46.1)	373 (100)	
④ 臓器を提供する意思				
提供する	提供しない	わからない	不明	計
147 (39.4)	64 (17.1)	161 (43.2)	1 (0.3)	373 (100)
⑤ 脳死臓器移植について家族と話し合ったことがある				
はい	いいえ	不明	計	
142 (38.1)	227 (60.8)	4 (1.1)	373 (100)	
⑥ 15歳未満の臓器提供ができないことを知っている				
はい	いいえ	不明	計	
157 (42.1)	203 (54.4)	13 (3.5)	373 (100)	
〈臓器提供意思表示カードについて〉				
① 「臓器提供意思表示カード」を知っている				
はい	いいえ			計
269 (72.1)	104 (27.9)			373 (100)
② 「臓器提供意思表示カード」を所有している				
はい	いいえ	不明	計	
102 (27.3)	270 (72.4)	1 (0.3)	373 (100)	

石川他：脳死臓器移植に関する意識調査

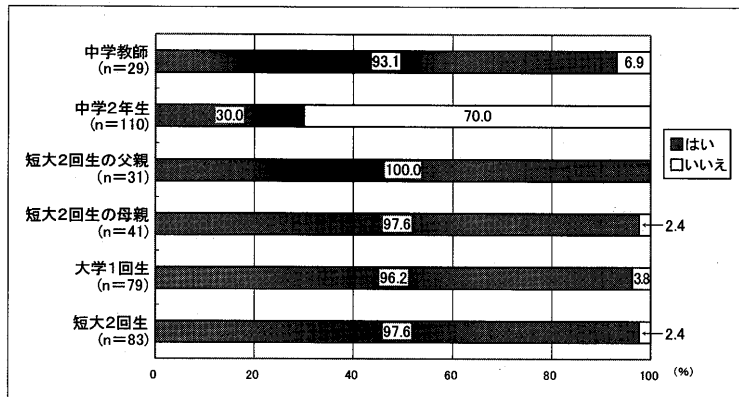


図2 脳死臓器移植について知っている (N = 373)

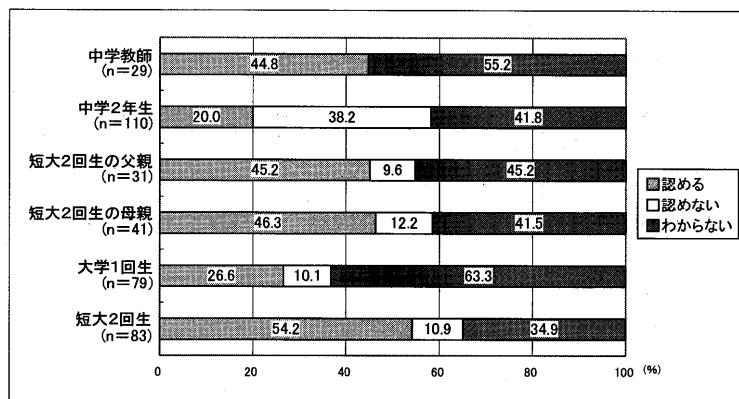


図3 「脳死」を人の死と認める (N = 373)

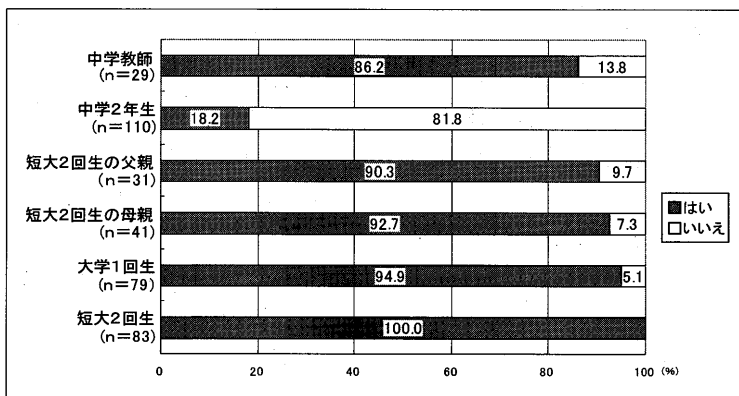


図4 「臓器提供意思表示カード」について知っている (N = 373)

うが大学1回生よりも脳死を肯定的に捉えていることが明らかとなった。

4) 「臓器提供意思表示カード」について

「臓器提供意思表示カード」は、中学生以外ほとんど (86 ~ 100%) の者が知っていた (図4)。短大2回

生と大学1回生の比較では、「臓器提供意思表示カード」の所有について、「持っている」2回生が76%、1回生が29%で (図5) 有意差を認め ($\chi^2 = 38.40$, $df = 1$, $p < 0.05$), 2回生は1回生に比べて臓器提供意思表示カードの所有率が高いことが明らかになった。

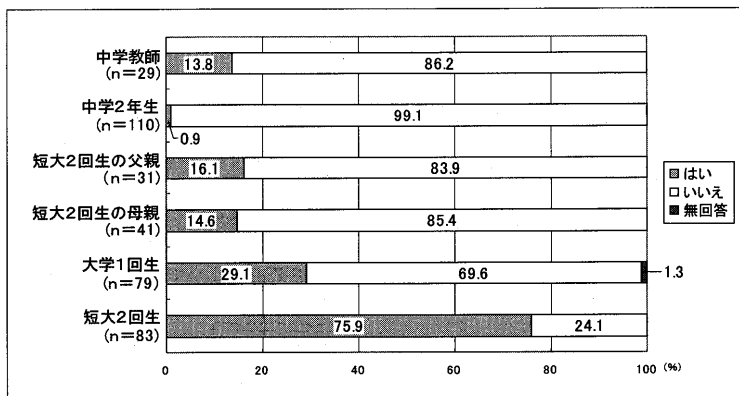


図5 「臓器提供意思表示カード」を所有している (N= 373)

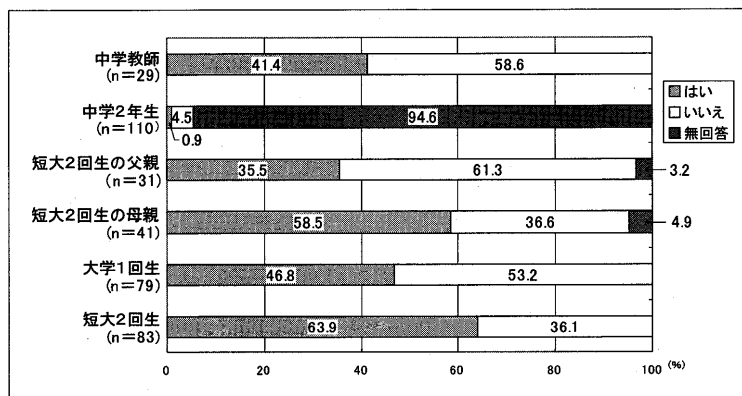


図6 臓器提供について家族と話し合ったことがある (N= 373)

また、短大2回生とその両親の比較では、「臓器提供意思表示カード」の所有については、「持っている」短大生が76%，両親が15%で、両群間に有意差を認め ($\chi^2 = 57.09$, $df = 1$, $p < 0.05$)、短大生は保護者よりもカードの所有率が高いことが明らかになった。

5) 臓器移植に関する家族の話し合いについて (図6)

中学生以外では36～64%の者が「話し合ったことがある」と回答した。短大2回生の父親と母親の比較では、「家族と臓器提供について話し合ったことがある」と回答した者は、母親が59%，父親が36%で、両群間に有意差を認め ($\chi^2 = 4.20$, $df = 1$, $p < 0.05$)、母親は父親よりも家族と臓器移植について話し合っていることが明らかになった。

6) 臓器提供の意思について (図7)

「提供する」が23～65%、「提供しない」が10～23%、「わからない」が24～54%と対象グループに

より様々であった。短大2回生とその両親の比較では、臓器提供の意思について、「提供する」が短大生65%、両親28%、「提供しない」が短大生11%、両親21%で、両群間に有意差を認め ($\chi^2 = 12.36$, $df = 2$, $p < 0.05$)、短大2回生のほうがその両親よりも臓器提供の意思が高いことが明らかとなった。

7) 中学生の脳死臓器移植に対する意識について (図8)

中学生については、他の対象グループと回答分布が特に異なるため、各質問項目への回答を比較した。脳死臓器移植について「知っている」が30%、「知らない」が70%であった。また、「『脳死』を人の死と認める」が21%、「認めない」が38%であった。「臓器提供意思表示カード」の認知については、「知っている」19%、「知らない」81%であった。臓器の提供意思については、「提供する」23%、「提供しない」23%であった。

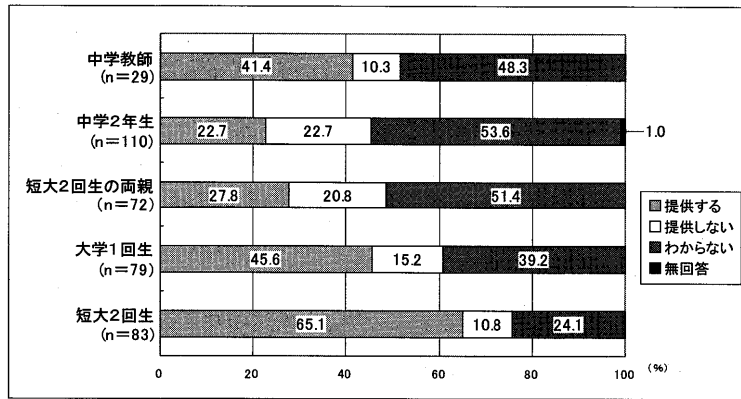


図7 臓器提供の意思 (N = 373)

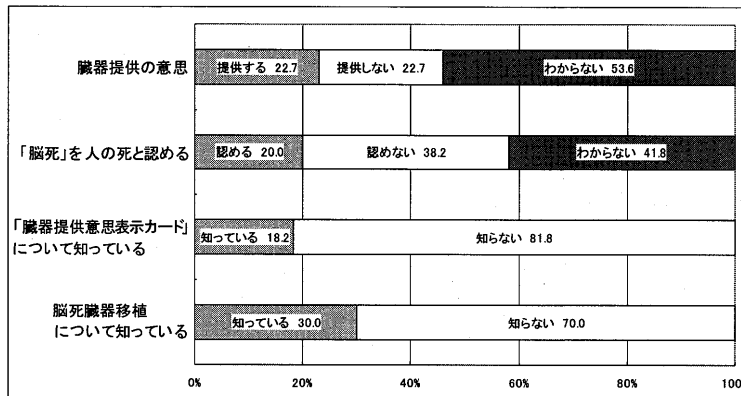


図8 中学2年生の臓器提供移植に対する意識 (N = 110)

Ⅲ. 考 察

1) 脳死と臓器移植について

今回の調査で「脳死」を人の死と認めると回答したものは全体で36%であり、看護学の基礎教育を受けた短大2回生は54%、基礎教育を受けてない大学1回生は27%であった。山崎⁵⁾が小学生、中学生の保護者315人に対して行った市民意識調査では、50%が容認し、「わからない」が37%、「心臓死に限る」が13%であった。平成11年5月に行われた朝日新聞社の世論調査⁶⁾では「脳死の容認」は約半数52%の人にみられた。近藤ら⁷⁾が看護大学生232人に対して行った臓器移植に関する意識調査では、40%が容認し、「わからない」が47%、「否定」が12%であった。学年別に「脳死」を容認する者は1回生39%、2回生34%、3回生49%、4回生36%であった。18歳以上の大学院生、大学生、短期大学生、専門学校生306人に対して行った木子ら⁸⁾の調査では、「容認」が27%、「心臓死」が63%であった。このように18歳

以上の若者の脳死に対する容認度は30～50%と幅が広いが、その教育過程によると思われる。今回の調査で短大2回生が高い容認度であったのは、1回生の基礎教育の中に「脳死と臓器移植」の講義があったことも影響している可能性がある。

総理府が行った平成10年⁹⁾および12年¹⁰⁾の「臓器移植に関する世論調査」の結果では「脳死で臓器移植が可能となったことの認知度」はそれぞれ78%と95%で、10年度と比較して12年度は約20%も上昇していた。今回の調査において、18歳以上の対象者では総理府の調査と同様にほとんどの人が知っていたが、中学生だけは30%と非常に低かった。

2) 「臓器提供意思表示カード」について

平成10年⁹⁾、12年¹⁰⁾の総理府の調査における「臓器提供意思表示カード」の認知度はそれぞれ63%と81%であり、今回の調査では72%であった。このカードの所有率をみると今回の調査全体では27%、短大生の両親は15%であった。山崎⁵⁾の報告では

11%、城川ら¹¹⁾は15%で、城川ら¹¹⁾の年代別にみた所有率では20歳代、30歳代の所有率が高く、高齢になるほど低率になった。総理府の調査では平成10年⁹⁾、12年度¹⁰⁾の所有率は2.6%、9.4%で、20歳代、30歳代、40歳代の所有率が同様に高かった。外国におけるドナーカードの所有率¹²⁾はイギリス40%、オランダ25%、フィリピン20%、スイス11%、ホンコン5%であった。

今回の基礎教育を受けた短大2回生の所有率は76%、大学1回生は29%であった。小林ら¹³⁾は看護短大1回生(80名)と2回生(82名)についての調査で、カードの所有率はそれぞれ39%と58%と高い所有率を報告している。今回の我々の調査と小林ら¹³⁾の調査から、このように1回生はまだ基礎教育を受けておらず、基礎教育の効果が確認された。また中山ら¹⁴⁾の報告に看護系学生の所有率は高いとあるように、今回の結果からも看護系学生の所有率は高かった。

3) 脳死臓器移植に関する家族の話し合いについて

臓器移植における脳死、臓器提供、「臓器提供意思表示カード」等を家族内で話し合うことは臓器移植を理解する上で非常に重要である。

臓器提供が行われる際は家族の同意が必要であり、また「臓器提供意思表示カード」にも家族の署名が必要である。今回の調査では短大生64%、大学生47%、父親36%、母親59%で、母親の方が家族と臓器移植についての話し合いが多くもたれている。山崎⁵⁾は「よく話し合う」2%、「少し話し合う」32%を合計した34%の家族で話し合いが持たれ、66%の家庭では臓器移植について話し合ったことがなかった。また子供の意見を知っている両親は26%であり、母親の方が子供の意見を知っていた、と報告している。総理府の調査⁹⁾では33%が話し合いを持たれ、男性30%、女性36%であった。以上より女性の方が家族とのコミュニケーションを多く持っていることがわかった。

4) 臓器提供の意思について

今回の調査の結果、全体で40%、短大生65%、大学生46%、両親28%、中学教師41%の臓器提供の承諾が認められた。城川ら¹¹⁾は54%の承諾率を認め、男女間では差はなく、年齢が上昇するに従い承諾率が低下した、と報告している。看護大学生に対する調査を行った近藤ら⁷⁾の報告では、全体で56%、1回生64%、4回生46%で学年が進行するに従い承諾率が低くなる傾向を示した。この現象は、学年が上になる

と専門的学習や知識の習得量が多くなり、脳死や臓器移植、それに加わる様々なリスクなどを考え合わせ、脳死者からの臓器移植に反対の意向を表している状態である、と報告している。総理府での平成10年⁹⁾、12年度¹⁰⁾の調査では32%、33%で、男女間では差がなく、30歳代をピークに臓器提供の承諾が減少傾向を示している。このように一般の人では30~40%、看護系学生は50%前後の承諾を得ている。我々の全体での承諾の割合が高いのは看護短大生の承諾が高かったためと考える。

5) 15歳未満の子供から臓器提供ができないことの認知度

山崎⁵⁾は「知っていた」が66%、「知らなかった」が34%で3人に1人が知らなかった。更に15歳未満の子供から臓器提供ができないことに対する見解では、約過半数の人が、15歳未満の子供からの臓器提供を認めても良いと考えていることがわかった、と報告している。今回の調査では「知っている」が42%、「知らなかった」が54%であった。この結果の差は今回の対象が学生中心に対し、山崎⁵⁾の対象は子供を持っている保護者であり、自分の子供に照らし合せたことがこの結果につながった、と考えられる。

6) 中学生に対する意識調査

調査対象の中学生110人は2年生であり、30%が脳死臓器移植を認知していた。また「脳死を人の死である」と認める者は20%であり、そのほとんどは臓器を提供する意思を持っていた。また「臓器提供意思表示カード」の存在を認知している者は18%であった。山崎は、約50%の小学生が「脳死」や「臓器移植」といった言葉をテレビや新聞から知った。さらに中学生の意識調査において「脳死とはどのような状態か」との質問に対し82%が「知っている」と答え、36%が「脳死を人の死である」と容認している、と報告している。このように小、中学生はこれまで臓器移植の教育の機会が少ないと思われるが、臓器移植といった先端医療に興味を持っている事がうかがえる。それゆえ今後この世代に教育が必要であることが示唆された。

7) 脳死・臓器移植に関する教育

今回の結果から基礎教育を受けた看護系短大2回生は受けてない看護系大学1回生より臓器移植の教育的効果が大きかった。また小林ら¹³⁾も今回の結果と同様

に1回生より2回生に教育的効果があったと報告している。18歳以上の若年者に対する教育は短期的な効果が期待できるが、長期的な効果を期待するには小、中学生に対する「生と死」、「脳死」、「臓器移植」、「臓器提供」などに関する教育が必要である。この教育は学校、家庭、地域社会において行われる。山崎⁵⁾は79%の保護者が「子供への教育の必要性」と、時期としては「小学校から教えても良い」と考える親が多い、と報告している。今回の調査より、「脳死」に肯定的な意見をもつ中学生は臓器移植に対しても肯定的である事がわかった。このように若い世代の教育は臓器移植の推進には有効な手段である。しかし小、中学校で教育する場合は、脳死や臓器移植を強く肯定的または否定的に教育するのではなく、木子ら⁸⁾が述べているように、あくまでも問題提起としてとどめておき、個人の意思を尊重していかなければならないだろう。

IV. 脳死臓器移植に関する教育への示唆

臓器移植法が施行され、臓器提供意思表示カードがすでに1億枚配布され、臓器移植の情報はテレビや新聞で十分報道されている状況下であるにもかかわらず、臓器提供は大変少ない。この臓器提供の行動を壮年期の人々に起こさせることはこれまでの経過からみても困難と考えられ、脳死臓器移植が円滑に推進するためには、臓器移植に肯定的な若者に対して臓器移植についての教育をすることが最も重要と考える。若者は大人と比べて臓器提供には前向きであり、特に中学生は思考能力が柔軟である。この時期に彼らに「生と死」、「脳死」、「臓器移植」、「臓器提供」等を教育することは「生と死」に対する考えを深め、脳死や臓器移植を肯定的、批判的に思考する能力を得、「臓器提供」といった問題に対応できるようになる。そのためには正しい情報を提供し、問題提起を行い、自分自身で臓器移植問題を判断できるような教育が必要である。このように若者の思考力育成を図り自分自身の判断で臓器提供意思表示カードを所持すれば臓器移植が円滑に推進すると考える。さらに「15歳未満では臓器の提供はできない」という問題である。この問題が解決しなければ小児の脳死臓器移植はできない。日本における小児脳死臓器移植は外国に頼っている現状を考え、今後早急に解決しなくてはならない。

V. 結 論

看護系短大生とその両親、看護系大学生、中学生とその中学教師に対して脳死と臓器移植に関する意識調査を行い、次のようなことが明らかになった。

1. 「脳死を人の死」と認める回答は36%であり、脳死臓器移植の認知度は77%であった。
2. 「臓器提供意思表示カード」の認知度は72%で、所有率は27%であった。
3. 「臓器提供の意思」は40%で、総理府での調査より高い承諾率が得られた。
4. 「脳死を人の死」と認める容認度、「臓器提供意思表示カード」の所有率、臓器提供の意思、は看護系大学1回生と比較して基礎教育を受けた看護系短大2回生の方が高く、教育的効果が大きかった。
5. 家族内での臓器移植についての話し合いは父親より母親の方が多かった。
6. 中学生に対する脳死臓器移植の認知度は30%であり、「脳死を人の死」であると認める20%の中学生の大半は臓器提供の意思を持っていた。

謝 辞

本研究にあたりアンケートにご協力頂きましたA大学看護学科1回生、A短期大学看護学科2回生、中学校教員の皆様および中学生の皆様、短期大学のご両親に心からお礼と感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 松田暉：命をつなぐ——臓器移植——。大阪大学出版会、73-76頁、2001
- 2) 須藤正親、池田良彦、高月義照：なぜ日本では臓器移植がむずかしいのか、東海大学出版会、128-134、1999
- 3) トランスプラントコミュニケーション・日本における臓器移植の歴史（年表）
[http://www.medi-net.or.jp/tcnet/DATA/history.html], 2004 2004/11/09引用
- 4) 須藤正親、池田良彦、高月義照：なぜ日本では臓器移植がむずかしいのか、東海大学出版会、216-231頁、1999
- 5) 山崎裕二：三鷹市・武蔵野市の小中学生および保護者の脳死・臓器移植に関する意識調査、日本赤十字武蔵野短期大学紀要14、107-119、2001
- 6) 朝日新聞、1999年5月26日版。
- 7) 近藤裕子、高橋由紀、南妙子、岩本真紀、近藤美月：看護学生の脳死と臓器移植に関する意識調査、香川医科大学看護学雑誌4(1)、17-23、2000
- 8) 木子莉瑛、木原信市、梅木彰子、下村直子、島田美穂：脳死・肝移植における意識調査、熊本大学教育

- 学部紀要自然科学 49, 1-10, 2000
- 9) 総理府広報室. 臓器移植に関する世論調査(平成10年10月調査). 月刊世論調査 31(6), 2-50, 1999
 - 10) 内閣総理大臣官房広報室編. 臓器移植に関する世論調査(平成12年5月調査), 総理府, 1-64頁, 2000
 - 11) 城川美佳, 長谷川友紀, 雨宮浩: 臓器移植に関する意識調査——臓器移植法施行後第1事例による影響——. 日本公衛誌 48(7), 521-533, 2001
 - 12) 長谷川友紀, 山川和夫, 大島伸一, 若杉長英: 諸外国におけるドナーカード利用状況. 移植 31(3), 239-244, 1996
 - 13) 小林光樹, 浅沼良子, 齋藤ひろみ, 杉山敏子, 柏倉栄子, 菊池史子: 看護学生の「脳死判定」と「臓器移植」に関する意識調査. 東北大医短部紀要 9(2), 175-180, 2000
 - 14) 中山佳美, 太田正樹, 一色学, 森満: 学生を対象とした臓器提供意思表示カードに関する教育効果の評価. 日本公衛誌 49(10), 1097-1105, 2002